



Rokko Catholic Church Bulletin

カトリック六甲教会 教会報

2013

6

No.498



生きている教会

ダニエル コリンス神父

ヨハネによる福音書 15 章及び 16 章で、イエスは弟子たちに語られました。もうじき自分は弟子達から離れ、父のもとに行くこと。自分が去った後、父のもとから真理の霊を送ること。その聖霊は弟子たちにとどまり、彼らを導き、真理を悟らせること。

つまり、ご自分が弟子たちの前からいなくなった後は、天から遣わす聖霊がすべて教えてくれるのだと告げられました。

この弟子たちの状況は、現在の私たちの状況と同じではないでしょうか。キリストは父のもとに行かれてしまっていますが、心の中には神の声である聖霊がとどまり、私たちに神のみ旨に沿った行い、生き方を促して下さることを私たちは知っています。

しかし、キリストが去った後の弟子たちの行動と私たちの現在の行動は同じでしょうか。ご存じのように、その後弟子たちは聖霊に従い、さまざまな形で、自ら真理を証していきます。私たちは聖霊を信じていますと口では言いますが、実際に聖霊の声に耳を傾け、それに応えていると言えるでしょうか。

私たちの教会は今、司祭数の減少や信徒の高齢化、また若い入信者の減少など色々な問題を抱え、将来を不安に思っていますが、それはあくまで人間レベルの組織の問題だと言えるでしょう。重要なのはこの現状を通して、十分に聖霊の動きをつかむこと。今の出来事を通して復活のキリストの霊がどう働いているのかを分かろうとすることです。果たして私たちは共同体として聖霊の動きを十分に掴んでいるのかどうか疑問です。

ではどうしたらよいのでしょうか。まずは口先だけではなく、心から聖霊を信じることです。本当に信じていれば、自ずと目に見える形で聖霊の働きを感じることができると思います。そして、その働きに応え、祈れば、後は神様にお任せすればよいのです。

いつものミサ、単なる儀式的な集まりとして、大勢の人がミサに参加していても、それは生きている教会だとは言えません。私たちは抽象的に理想の共同体を語ることは簡単にできますが、具体的に実行するとなるとたちまち動けなくなってしまいがちです。いつか具体的にしなければいけません。今がもうその時ではないでしょうか。

共同体の中心は復活のキリストです。復活のキリストが送ってくださる聖霊の声に、真剣に耳を傾け、現実を正しく理解し、受け止め、新たに正しい現実を作っていく、それが生きている教会だと思います。現在共同体で大いに活躍している人たちだけではなく、様々な理由で今は共同体を離れてしまっている人たちも、誰一人捨てられていない教会（＝生きている教会）を目指しましょう。





シリーズ「何でも知っとこ」(3)

「聖母の訪問」にあたって

ダニエル・コリンズ神父

5月31日は、聖母の訪問の主日です。「わたしの魂は主をあがめる」Magnificat anima mea Dominum というラテン語の長いフレーズから名付けられたマグニフィカトMagnificatが、福音朗読に含まれています。この祈りは、「マリアの賛歌」とも呼ばれ、週日の晩の祈り（教会の祈り）で毎晩唱えます。この賛歌は、神への賛美と感謝の重要な部分として、晩の祈りを特徴付けます。

私たちは、私たちの命のために、この賛歌の力と可能性をどのように体験することができるでしょうか。私たちには、1世紀の初めのガリラヤに知性と心で旅をし、マリア様と一致することができます。妊娠している若いガリラヤの娘が、田舎の丘を越えて、エルサレムに近い町に住む妊娠している年上のいとこを訪ねるところを想像してみてください。彼女はどのように祈ったのでしょうか。主日のための聖書の言葉が、いくつかのヒントをくれます。おそらく、マリア様は、イザヤ12章から「わたしを救われる神。わたしは信頼して、恐れない。」と歌ったでしょう。マリア様は、シオンの娘として喜びのうちにあります。マリア様は、彼女のただ中に主がいらっしゃることを知っています。マリア様がユダヤの荒れ野を用心深く歩く時、主は彼女のゆえに喜び、愛によって彼女を新たにします（ゼファニヤ3）。

旅の途中で、マリア様は何を考えたのでしょうか。数ヶ月前の天使ガブリエルとの対話についてじっくり考えたかもしれません。神の子を身ごもって産むということに「はい」と答える彼女の自由な決断は、彼女の想像からかけはなれたことでは決してありません（ルカ1：26-38）。神様の導きは、いとこエリサベトのためには、どのように赤ちゃんについて準備させることができたのでしょうか。

マリア様がエリサベトの家に入り、挨拶した時、エリサベトの胎内の子がおどりました。彼女たちは、喜びにあふれ、情熱的に、胎内の子の胎動について語り合います。二人とも、お互いを力づけるための聞く耳と思いやりに溢れる心を持っています。この親戚の女性たちは、望んだり、想像したりすることができる以上のものを与えて下さる神を体験することについて、深く分かち合います。

マリア様の賛美の歌（ルカ1：46-55）は、喜びあふれる魂からあふれます。彼女の召命と祝福は賜物です。マリア様は命の神と出会い、すべての人々、祖先にもこれから生まれる者にも、神様は、思いやり、日ごとの糧、自由、憐れみを与えることを知っています。マリア様は、一人で祈っているわけではありません。詩編を書いた人々やイザヤも影響を与えていますが、マグニフィカトには、旧約聖書のハンナの息子の影響がみられます。「主にあってわたしの心は喜び。。。弱い者を塵の中から立ち上がらせる」（1サムエル2：1-10）

マリア様は、親戚の女性と私たちに、知恵を持って深い経験を分かち合うことを恐れない、勇気のある女性です。マリア様のあからさまな信じる心は、日々の生活の中で私たちを力づけます。家族、共同体、教会、地域社会において、どのように他の人と出会っていますか。マリア様の驚くべき恵みの物語を分かち合う人に、耳を傾けることができますか。お互いにとって、私たち自身がキリストの現存であることを認識していますか。

マリアの賛歌を祈り、聖母の訪問を祝ううちに、私たちもマリア様とエリサベトとすべての神様の人々に加わって、宇宙にこだまする賛美と感謝の歌を歌いましょう。（和訳：本郷あい）



忘 れ な い で !

～東日本の被災地から～

「東日本被災地のボランティア活動報告」

第2回 「寄り添う」こと

カリタス大船渡ベース「地の森いこいの家」では、毎日「お茶っこ」と呼ばれる、地域の住民に開かれた時間があります。ベースの建っている場所そのものが津波の被災地であり、周囲の至るところにまだその爪痕を残していますが、道に向けて大きく取られた窓からは、行き交う人々がよく見え、外からも中の様子が丸見えです。そんな中、ふらりとやってきて、お茶を飲みながら会話をしたり、趣味のひとつを披露したり、そんな時間を共に過ごすこともボランティアのひとつです。



うち解けてくると、あの日のことを話してくれたりします。心が潰れそうになることもあります。一緒に泣いてしまったり、笑い飛ばしてみたり、流れる時間の中で、自分がここにいることを冷静に考えていられないことさえありました。そして、様々な課題や問題も見えてきます。「お



茶っこ」に限らず、夜ボランティア仲間と仮設の屋台村に行って、地元の人たちと酒を飲みながら話をしている、多くのことが現実そこに問題として見えてきてしまいます。

大船渡の場合、行政機関の多くは被災を免れています。水産業の中心地は壊滅的な被害を受けていますが、盛地域は何もなかったような町並みがあり、同じ行政区域の中での差が大きいということが目に見えていて、住民の中に壁ができていたことも会話の中で感じることでできてしまうのです。地の森いこいの家にあっても、わずか十数メートル山手に向かえば、以前のままの姿で家が建ち並んでいます。街ごと津波で流された地域と違い、こうしたことが将来の大きな見えない壁になりかねないことを感じます。

でも、ボランティアにその答えはありません。そこに住んでいる人々が解決しなければならない問題だからです。お金や物資で解決するものでは決してなく、ましてそこに住み続けることのない者にとって、できることは「ひとに寄り添う」ことしかないから、分け隔てなく、そこでかわった人と「向き合う」のです。「お茶っこ」で感じる難しさは、もどかしくても原点から離れられないことからくるのかも知れません。

一方で、南三陸町を活動の中心としている米川ベースでは、「お茶っこ」も道具一式携えて、南三陸の小学校等に出向いています。目に見える、組織としての活動ではなく、地道な「寄り添い」の場として続けられていますが、ここでも別の問題が浮上してきていました。災害から丸2年を経過し、社会の関心が薄れつつあるなか、活動資金が集まらなくなってきたボランティア団体が次々に撤退を余儀なくされてきているのです。実際にこの年度末で撤退する団体が多く、ボランティアセンターの運営そのものが危機に立たされている状況になっています。そこで、息の長い活動を表明しているカリタスジャパンに、中心的な役割を依頼してきているというのです。



カリタスジャパンの行ってきた活動は、地域でも本当に高く評価されていることが人々との会話の中でも、また漁協や自治会の責任者の方からの言葉でも感じられます。しかしその一方で、地域ボランティアセンターの中心となることを要請されていることに対して、慎重にならざるを得ないスタッフの苦悩を聞くことにもなりました。純粋に善意で集まったボランティアの方々に

対し、カトリック教会の世界的な活動団体であるカリタスジャパンがどのような立場に関わっていくのか、決して報道されることのない問題が現地では起きているのです。

「誰に寄り添うのか」、ベースで心を尽くして働いておられるスタッフの方々にも大きな苦悩があります。その答えが見つかることを共に祈りながら、ボランティアの方々は今日も被災された方々と、活動先や「お茶っこ」で寄り添っています。神様は「集めた」人々に対してだけでなく、それぞれの生活の場で生きている全ての人に対して「寄り添い」の機会を与えておられると思います。形がどうあれ、知ったことに対して無関心ではなく、祈りと共に、できることをするように勧められているように、帰ってきてからも感じています。



志津川防災センター跡では今日も多くの人々が訪れて祈っていました。

最後まで放送で住民に避難を呼びかけ、自らは津波の犠牲になった、若い女性職員のご両親は、娘さんの名前をつけて民宿を開かれるそうです。いつまでもこの災害を忘れて欲しくないとの願いから。この思いにも寄り添いたいと思います。

それぞれのベースの活動内容をブログでみることができます。関心のある方はどうぞ。

大船渡ベース <http://ameblo.jp/ofunatobase/>

米川（南三陸）ベース <http://cjyonekawa.wordpress.com/>

2013 年 第 1 回小教区評議会議事録

◆日 時： 2013 年 5 月 19 日（日）11：15～13：15

◆場 所： 第 4 会議室

◆出席者： 松村主任司祭、片柳助任司祭、議長団、評議員、神戸地区大会役員

～．

小教区評議会議長団の紹介とご挨拶

小教区評議会議長 飯塚

このたび蛭田武前議長の後を受け、飯塚が小教区評議会議長を務めさせていただくことになりました。小教区評議会は各信徒会と専門部会の代表で構成されていますが、その評議会の運営を進める今年度の議長団は、松村主任司祭、議長飯塚、副議長に小林様と堤様、書記として中川様（壮年会）と吉村様（婦人会）、そして地区会役員代表川合様の計 7 名で構成されています。

今年は「信仰年」にあたり、また新教皇さまへの期待も高まる中で、いよいよ定着し本格運転に入った地区会の実働を支えに、世代のつながり信徒会、伝統を継ぎ刷新を図る専門部会と力を合わせ、共同体の一人ひとりが生き活きと信仰を深め、福音を告げ報せていけることを目指し、よき牧者の声を聞き分け、聖霊のはたらく共同体であるよう祈り、生きていきたいと思ひます。

わが小教区の共同体もまわりの他の社会と同じく、少子高齢化しつつあるのは事実です。若い世代のエネルギーの開拓と涵養、全世代が支えあう絆の強化・・・立向かわなければならぬ課題もたくさんありますが、信徒の皆様からの幅広い、積極的なご意見・提案を頂いてのご指導とご協力を、そして何よりもお祈りをよろしくお願いいたします。



小林副議長・飯塚議長・堤副議長

東ブロック合同堅信式

5月12日(日)

✠堅信を受けられた皆様おめでとうございます

晴天に恵まれ、3教会合同の堅信式が執り行われました。六甲15人、住吉6人、神戸中央13人、合計34の方が堅信を受けられました。池長大司教様をはじめ、松村、赤波江、片柳、オマリーの各神父様が司式されました。司教による塗油が行われた後、聖体拝領はパンと葡萄酒を直接いただく両形態で行われました。最後に信徒を代表して中学3年生の柴原誠君から池長大司教様にお礼の言葉が述べられ、司教から受堅者の皆様に堅信証明書と記念品が手渡されました。ミサ終了後、記念撮影が行われ、外国人も参加された和やかなパーティーに会場は大いに盛り上がりしました。

受堅された方々は聖別された油を塗られ、「父のたまものである聖霊のしるしを受けなさい。」として大きな神様のお恵みを受けられたことでしょう。心からお祝いを申し上げるとともに今後のご活躍をお祈り致します。

ところで、今回の合同堅信式は六甲では6年ぶりでした。

5月5日の3教会合同の事前勉強会の講師は神戸中央の山本神父様がつとめて下さいました。裏方をつとめられた信徒の方々は当日の典礼関係者だけでも約40名、それ以外に各教会では事前の勉強会が行われましたがその講師、お世話をされた方、また、式次第の原稿を夜中までかかって仕上げられた方、英語の歌の練習を夕方遅くまでされた方々、パーティーの準備、運営を行われた方々、会場準備、式次第の印刷に協力された方々etc. 多くの方々のご尽力がありました。

ある裏方がいわれた「深く物事に関わるほど神様の大きなお恵みを感じます。」という言葉の中に救いを見出しました。

(典礼部コーディネーター 河野)

私は、今回堅信を受けるにあたって3回勉強会に参加しました。その中で、2つ印象に残ったことがあります。

1つ目は、イエス・キリストが「完全であれ」とおっしゃったその意味は、真実の自分、ありのままの自分になることだ、というお話です。欠点のない自分が完全な姿だと思っていましたが、もともと私という人間は神様がつくられたもので、ありのままの自分こそが神様がおつくりになった姿であり、欠点と思われる部分までも大切な所なのではないか、と気付きました。

2つ目は、大人の信者の3つの務めです。祭司職・預言職・王職という3つを、日々心にとめて、教会の中の“大人”であるという自覚を持つように心がけて行きたいです。

最後に、今回この堅信式を行って下さった司教様、勉強会を行って下さったリーダー方、そしてミサの中で共に祈って下さった方々、本当にありがとうございました。

(マリア ガブリエラ 奏)

この度、堅信の秘跡を受けられたことを、感謝したいと思います。

池長大司教様へのご挨拶でも申し上げた通り、堅信は言うなれば元服です。物騒かもしれませんが、キリストの戦士として、世に送り出されるのだと考えた時、私は、六甲学院創立75周年に際し、3代目校長の栗本神父様が寄せられた「(六甲学院は、霊性を育てるために創られた学校であるから)最後の一人まで十字架を死守しなくてはいけない。どんな暴風雨が来ても、支えなくてはいけない。これが一番やりがいがある」というメッセージを思い出しました。

日本では、カトリック信者は、超マイナーです。神様の名の下に、過激に人と争ったり、排他的になったりすることはいけません。でも、時には信仰を守るために、世の流れに逆らって、人とは違う生き方をしなければならないこともあるでしょう。中学生の私でさえ、学校生活を送る中で、有名な大学や企業に入って、金銭的・物質的に豊かになり、社会的な地位を得るためだけ

に学び、生きているのかとジレンマを感じることがあります。

堅信の秘跡を受け、私たちは教会において、大人の仲間入りをしました。目まぐるしく移り変わる世の中で、どんな暴風雨が来ても、キリスト者として自分の十字架を背負い、イエズス様についていかなくてもいいと思います。

最後になりましたが、私たちの堅信式のために、大司教様や神父様をはじめ、教会の方、家族、その他たくさんの方に、ごミサ、勉強会や祝賀会でお世話になり、何よりお祈りしていただいたことに、心から御礼申し上げます。

まだまだ未熟な私たちを、今後ともご指導して下さいます様、どうぞよろしくお願い致します。
(クリストファー 誠)

私は幼児洗礼だったので堅信を受けました。

周りの人や学校の先生方からも祝福を受けました。

前からたくさんの方に不安があり、今も不安がありますが前よりも神様が近くにいてくださると感じられるようになり、少しは不安感が減って楽になったと感じています。

これから大人の信者の一員としてよろしくお願いします。(マリアグラッチャ穂乃佳)



合同堅信式パーティーをお手伝いして

5月12日に行われた3教会合同堅信式の祝賀会を、阪神・灘北2地区が担当してお手伝い致しました。

地区役員が新しく切り替わった最初の行事でもあり、100～150名の食事をまかなうという課題に緊張しながらの準備。今回は、地区の高齢化という事情もあり、全て外注になりました。お寿司、サンドイッチ、ケーキ、コロッケなどは当日の朝、届けていただきました。これらの近隣の業者さんの協力振りも有難く、教会というものが地域に違和感無く受け入れられていることを改めて実感しました。

前日と当日に分れて両地区のメンバーが働いて下さり、確かに高齢化はしているものの、それぞれが手馴れた分野で動かれるというメリットもあり、また復活祭に受洗されたばかりのメンバーもお手伝い下さるなど、顔合わせの機会にもなりました。阪神地区のK氏はお孫さんが受堅なさったのですが、台所でご活躍下さいました。散会後はエプロンと共に一人残られて、最後まで後片付け・・・今更のようですが、男女の区別無く台所仕事を協力してこなす光景には新鮮な感動があります。一方で高齢化があり、また一方で世代交替も確かに進んでいることを思わせられました。

パーティーの賄いに関しては幾つかの失敗もありましたが、これは次回に生きる経験となるはず。次回、六甲教会の担当は6年後になりますが、今回の経験が少しでも役立つよう、反省点を記録に残して伝えたいと思います。皆さまのご協力に感謝しつつ。(灘北2 久野)



<行事報告>

宣教部主催 春の黙想会 5月18日(土)

「春の黙想会」に参加して

青葉鮮やかな5月18日、六甲学院生徒研究所で開かれた春の黙想会に参加させて頂きました。ご指導は赤松神父様。テーマは「信仰のまなざし」

最初の講話は、人間の側からの神へのまなざしとして「金持ちとラザロ」(ルカ 16:19)から聴かせて頂きました。貧しくただ横たわっていただけのラザロが死後、天国では特別席を与えられた。神様はラザロを理想の信仰者とみておられる。「ラザロのまなざし」に学びます。

次に「イエスのまなざし」について、いくつかの聖書箇所から取り上げて下さいました。まず「貧しい人々は幸いである。神の国はあなたがたのものである」と宣言されるイエスの言葉を聞きます。マタイ5章とルカ6章の「幸い」を比べて、ルカの表現の方がよりイエスのまなざしに近いとされているといわれる。何故なら「貧しい人々は幸い」・・・この表現は一般的には非常識なものであり、旧約聖書にはない新しさがああり、これがイエスの言葉だから・・・と説明して下さいました。赤松神父様のお話に引き込まれていきました。

ありふれた日常生活の中で神の働きを見ておられるイエスは「思い悩むな」(ルカ 12:22)と語られます。空の鳥、野の花のように神様が養って下さることを信頼して生きるよう教えられます。これが私たちをごらんになるイエスのまなざし。

「種を蒔く人のたとえ」(ルカ 8:4)は、人々がイエスのもとから去って行った時に語られたたとえ話だと言われる。物事がうまくいっていない時でも確実に神様は働いておられることを確信しておられるイエスのまなざし。

イエスにとっても神不在であった受難の時、「わが神わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ 27:46)これが「父を仰ぐイエスのまなざし」。神不在の体験の中で御父と生きているイエスの心は、御父を仰いでみ旨を果たしたい事と弟子たちを愛している事、ただそれだけの単純な心。イエスと同じく、ラザロも怒りや恨みのない単純な心で空の鳥、野の花のように神に信頼した生き方だったのではないかと思います。

ラザロのような単純な心を持たず、常に思い悩む私には、ラザロのように生きることは難しいですが、イエス様が共にいて助けて下さることを信頼していきたいと思います。

黙想の後、ごミサに与りました。ヨハネによる福音書 21:20-25 に「弟子たちのイエスを仰ぐまなざし」を味わいました。

「信仰のまなざし」という美しいテーマについて、聖書に描かれる4つのまなざしから説き明かして下さいました赤松神父様のご指導に感謝いたします。爽やかな思いに満たされた一日でした。有難うございました。

(塩飽)

宣教部から

5月18日(土)六甲学院生徒研修所において、赤松神父様指導の下、宣教部主催の春の黙想会が行われました。六甲教会だけでなく、他の小教区も含め35名ほどの方が参加されました。今年度は秋にも、同じく赤松神父様の指導で開催する予定です。

さて、宣教部には「宣教部の活動の方向性がよくわからない。なぜ信者向けの黙想会を主催するのか」という声が寄せられることがあります。

わたしたちがふつう「宣教」という言葉から抱くイメージは、社会に向かって神さまの教を宣べ伝えたり、イエス様に倣って貧しい人や苦しんでいる人に援助の手を差し伸べたりするというものではないでしょうか。宣教には何か具体的な活動が伴っていなければならないという訳です。

「宣教＝活動」であるならば、宣教部と黙想会は結びつきにくいと思います。確かに、宣教にはそういった側面もありますが、それがすべてでしょうか。

それでは、宣教とはいったい何でしょうか。教会が「宣教師の保護者」として掲げている二人の聖人にヒントが隠されていると思います。そのうちの一人は聖フランシスコ・ザビエルです。日本に初めてキリスト教を伝えた人です。現在のスペイン・バスク地方出身のザビエルは、イエズス会の最初のメンバーとなり、地球の反対側にある日本にまで福音を述べ伝えました。「宣教＝活動」であるなら、宣教師の保護の聖人として最もふさわしいでしょう。

もう一人はリジューの聖テレーズです。観想修道会のひとつであるカルメル会の修道女だった彼女は15歳で入会してから24歳で帰天するまで、修道院を一步も出ませんでした。限られた時間と空間の中で生涯を送ったテレーズでしたが、あらゆる手段をとおして、あらゆる場所に行って福音を宣べ伝えたいという情熱をもっていました。その思いが実現したのは、誰にも知られることのない隠れた祈りによってでした。それ故、教会は宣教師の保護の聖人と認めたのだと思います。

実は行動的だったザビエルも、キリストの奥義を深く味わう観想家だったことが知られています。ザビエルとテレーズ、この二人に共通するのは「神さまとの深い愛の交わり」から溢れる福音宣教への強い思いでした。

わたしたち一人ひとりも救いの喜びを全世界に告げる「真の宣教者」となるよう召されています。そのためにはまず、ザビエルやテレーズのように日常で神様と深く交わることが大切であると言えましょう。宣教部では、日常から離れた場で指導を受けることによって、わたしたち皆がさらに豊かな祈りを体験できるのではないかと考え、黙想会を主催しています。

宣教部では年二回の黙想会の他に、昨年度まで養成部が主催していた雨宮神父様の聖書講座（予定：9/21、9/22 両日とも 13：30～）も担当することになりました。どうぞ、こちらの方もふるってご参加ください。よろしくお願いいたします。（宣教部コーディネーター 佐久間）



<行事報告>

オルガンメディテーション 5月18日(土)

5月18日午後5時半より、オルガンメディテーション 第6回を行いました。

「聖霊降臨に寄せて」ということでオルガン独奏には主に聖霊降臨にちなんで、コラールを演奏いたしました。

今回は大津睦・内藤謙一夫妻が始めてデュオで出演してくださいました。内藤さんは「小百合児童館の子供の頃からずっとお世話になっている教会で、初めて楽器を弾かせていただけて、感無量でした。」ということでした。バロック・ヴァイオリンとヴィオラ・ダ・ガンバの響きは静かに御聖堂に満ち、素晴らしい祈りの時間となりました。



土曜日夕刻のオルガンメディテーションは初め

ての試みでしたので、50人ほどの聴衆でしたが教会外の方が多く、教会に足を運んでいただく良い機会になったかと思います。

教会に音楽で奉仕して下さる方々がたくさんおられて、嬉しく思います。

次回は9月29日午前10時のミサ後に行います。よろしくお願いいたします。（三浦）

《各部だより》 各専門部会の活動をお知らせいたします

📖 三日月会

6月17日(月) 例会

📖 典礼部

6月15日(土)・23日(日) 典礼奉仕者の集い

📖 中高生会

6月15日(土)～16日(日) 一泊錬成会
テーマ「自分の将来」
場 所 六甲学院

📖 宣教部

6月23日(日)11:15 部会

📖 教会学校

6月29日(土) リーダー研修会

📖 社会活動部

7月5日初金ミサ後 第2回連絡会

📖 施設管理部

6月23日(日)10時ミサ後 部会

《お知らせ》 教会のみなさまに知って頂きたい活動やお知らせです

★小教区評議会より★

6月16日(日)10時ミサ後、大聖堂で「**小教区評議会年次報告会**」が開催されます。

教会の財務報告、小教区評議会の会計報告、地区会の報告など重要な報告が行われますので、多くの方の参加をお願いします。

★社会活動部より★

6月5日(水) 10時 ♪**手芸の集い** 第1・2会議室 どなたでも参加ご自由です。

6月8日(土) 10時 ♪**炊き出し** (イグナチオお台所)

小野浜グラウンドにて配食や、おじさんたちとのお話し相手だけでもOKです。

6月16日(日)10時ミサ後 ♪**ふれあい広場** (イグナチオホール)

お弁当・手芸品・雑貨等の販売や東北支援物産店も出店します。

6月24日(月)9時30分 ♪**ともしびケーキ作り** (イグナチオお台所)

★教会学校たより★

5月に入り、気温もやっと上がってきました。自由時間で遊ぶ子供達の激しい汗を見ていると運動していないこちらまで、息があがってきそうです。

1学期も6月になると初聖体・祝福式に始まり、夏のキャンプの準備なども本格化し、季節が背中を急き立ててきます。

あわただしさの中で、子供の健康管理など安全面について、おろそかにしたくないものです。

1 学期（6 月以降）の教会学校予定

6 月 1 日（土） 初聖体・祝福式リハーサル

6 月 2 日（日） **初聖体・祝福式** 10 時ミサ

初聖体・祝福式のお祝い会 11 時 30 分からイグナチオホールにて

6 月 29 日（土） 教会学校はお休みです。

7 月 13 日（土） 終業式

7 月 14 日（日） こどもと共にささげるミサ

7 月 27 日（土） キャンプ準備会

8 月 8 日（木）～11 日（日） キャンプ

イエスのみ心ミサ

6 月 7 日（金） 10 時 イエスのみ心ミサ

ミサ後 聖体顕示

12 時 聖体賛美式

本年はミサ後、約 1 時間の聖体礼拝を予定しております。

皆様のご参加を、よろしくお願いいたします。（典礼部）



広報部からお知らせ

この度、広報部でビデオカメラを購入しました。
貸し出しの際は、事務所に所定の手続きをして下さい。
尚、借りた部署は付属部品、説明書など紛失しないよう
をお願いします。



《図書室からのお知らせ》

～投書箱にあった「推薦します」の本の紹介

「置かれた場所で咲きなさい」

—— 渡辺和子 幻冬舎

時間の使い方は、そのままいのちの使い方。置かれたところこそが、今のあなたの居場所なのです。

「こんなはずじゃなかった」と思う時にも、その状況の中で「咲く」努力をしてほしいのです。

ベストセラーで、神戸市立図書館に 47 冊所蔵されていますが、予約が 600 人以上待ちだそう
で、よく読まれている話題の本です。本屋さんにもまだ並んでいます。入院中に頂いてとても
励まされたとのこと。お見舞いに最適の本と思います。また図書室に置くというより、座
右において、日々味わうという本と思います。同じ著者の本で **「愛をこめて生きる」「愛さ
れることは許されること」「目に見えないけど大切なもの」「忘れかけていた大切なこと」「ひ
と」として大切なこと** など 7 冊（いずれも P H P 新書）も別の方から「若い人に」推薦してくださ
いと投書がありました。

そのほか、次の本の推薦もありました。これからも図書室に関するご意見や問い合わせなど、声をお聞かせ下さい。なお、これらの投書にはどなたから頂いたのかが記名されていたので、お話しも伺えたのですが、できましたらこのような際には記名をお願いしたいと存じます。

「好奇心だよ 好奇心」—— クロード神父 女子パウロ会
「霊操」—— イグナチオロヨラ 岩波文庫

📖 図書紹介

『およぐひと』 長谷川集平（解放出版社）

「東日本大震災は 終わっていない
失ったものの大きさに慄然とする
報道をはじめ私たち大人は 何をしたらろう
何ができるのだろう
自宅に戻りたい人 遠くに行かざるをえない人
私たちは何を求めているのか」



4月に出版されたばかりの絵本（解放出版社）です。作者の長谷川集平さんは、姫路出身で長崎在住のカトリック信者。『はせがわくんきらいや』の作者としてご記憶の方もいらっしゃると思います。

この絵本、出版されるまでに数々の困難があったと聞きました。

ある編集者からは「今必要なのは“笑い”だ」と、断られたそうです。

笑える絵本…。私たちが欲しているのは、本当にそんなものだけなのでしょう。

例えば、“癒し”という言い様が流行語のようにあちらこちらで聞かれますが、一時しのぎでない、3.11で砕け散った心を拾ってくれるような表現が、そんな本や音楽がこの二年間で一体どれだけ私たちの手元に届けられたのでしょうか。

この絵本には、何らかの答えが描かれているわけではありません。単純にがんばれと言うような励ましでもありません。むしろ、性急に結論を求めることをしない、どこまでも人の心に寄り添い続けるということを考えさせられます。生きている人も死んでしまった人も、双方が寄り添いながら希望の在り処を見い出していこうとするような…。

その意味ではラブストーリーだと言えますし、3.11が題材ではありますが、もっと普遍的なものを指し示しているようにも感じます。

「やっと自分たちの気持ちにぴったりくるようなものに会えた」といった、被災者の方からの声もあったと聞きますのに、大変に厳しい条件での出版を強いられている絵本です。

詩のように静かに響いてくる言葉、シンプルで透明感のある絵（こんなに真直ぐに愛情を込めて“人”を描くことのできる作家は中々いないと思います）、この美しい、でも実はしみもたつぷりある絵本が多くの人に知られずにいるなんてもったいない！ それで、この場を借りてご紹介させていただきました。

また、同じ作者の阪神・淡路大震災を取り上げた絵本『あしたは月よう日』（文研出版）もおすすめです。神戸弁で展開される話がうれしく楽しく、笑って、泣けます。天使も登場します。こちらもぜひ。

（田中 雅子）

※ 上記絵本はアマゾンでも取扱っていますが、長谷川集平さんのHPからだと作者本人の素敵なサイン入りで購入することができます。

www.cojicoji.com/shuheji/



みんなの広場

お世話になったお返しに ～小教区評議会副議長就任の挨拶にかえて

六甲教会でお世話になることになったのは、1958年 兄が六甲中学に入学したのがきっかけになります。当時小学校3年生だった私は、土曜日の放課後になると、武宮先生のお話（公教要理）を聴くために母に連れられて遥々明石から六甲会館（現ザビエルハウス）まで毎週通っておりました。長い話の内容はチンプンカンプンでしたが、眠らずおとなしく聞いておりました。

約2年が過ぎて、1960年、兄は他の生徒と一緒に学校の聖堂で、我々母子も他のお母さん達と一緒に六甲教会でブラウン神父から洗礼を受けました。この間、子供用の公教要理や「天からきた人」という本を何回も読んだ記憶があり、受洗前の試験で「せ、せ、せい・・・『成聖の聖寵』」としどろもどろに答えて合格を頂きました。

結婚式は六甲教会で挙げさせて頂き、ブランガン神父に洗礼を授けて頂いた双子の娘達は、初聖体も堅信も六甲教会でお世話になりました。孫もまた、ブランガン神父から洗礼を授けて頂き、初聖体も当教会で、また今回の合同堅信式で堅信を受けさせて頂きます。

六甲教会には三世代に亘ってお世話になっておりますので、少しでもそのお返しをしなくてはと思いつつ、会社を辞めてからも、二地域居住生活で、なかなか時間のゆとりがなくして申し訳なく思っておりました。そんな中で今回の大役（評議会副議長）を仰せつかることになり、十分にご期待に添えるかどうかは判りませんが、一生懸命頑張りたいと考えております。よろしくお願い申し上げます。
(小林 修)

聖イグナチオ学院中学校高等学校開校のご報告

2002 年にインドネシアより独立した東ティモールは、今なおアジアの最貧国の一つです。2012 年末に国連が撤退しました。今後は自分たちで国づくりが進められてゆくことになりますが、とりわけ教育は重要な役割を果たすと思われます。聖イグナチオ学院は貧しいこの国の子どもたちにより中等教育を受ける機会を提供すること、開校準備中の聖ヨハネ・ブリート学院（教育大学）はよく準備された高等学校の教員を養成することを目的にしています。学校建築と運営の大部分をご寄付や設立母体のカトリック・イエズス会からの援助でまかなっているのが現状です。

六甲教会からも松村神父様を通して、チャリティバザーからの寄付や社会活動部から文房具等を送るなどの支援をしています。「頂いた文房具・ファイル・黒板消しは活躍しています。ご協力くださった方々にお礼をお伝えください。」との浦神父様のメッセージが届けられました。ニュース・レターからピックアップします。

神戸の六甲中学高等学校から机・椅子と図書館の閲覧机・本棚をご寄付頂き、コンテナで学校まで届けていただきました。机と椅子は、ドイツ人修道士故メルシュさんの手作りです。長い間六甲学院の中学生が愛用してきたものです。ありがとうございます。作業しているのは地元の大学生で、バイト代はすべて食べるために使ったそうです。



2013 年 1 月 15 日、準備が進められていた聖イグナチオ学院が開校しました。中学 1 年生 83 名が毎日元気に学校に通ってきています。

聖イグナチオ学院を紹介する HP とブログは
「東ティモール 聖イグナチオ学院」
で検索できます。

問合わせ・ご寄付宛先 ※ご寄付を頂ける場合はご連絡を頂けますようお願いいたします。

■振込先 みずほ銀行 四谷支店 普通預金 2 2 3 2 1 6 4
(宗教法人カトリックイエズス会) 東ティモール聖イグナチオ学院基金
↑ () 内は省略できます。

■連絡先 Y o s h i t a k a U r a (現地世話人・聖イグナチオ学院基金責任者)

Residencia Santo Inacio de Loyola

Taidesi, Cinarate, Dili, Timor Leste P.O.Box209

Tel : +670-7700-5866 (時差はありません) e-mail : urasj@jesuits.or.jp

* 詳しくは聖イグナチオ学院基金 HP をご覧ください。http://www.jesuits.or.jp/~j_urasj/index

教会報 7 月号の発行は、6 月 30 日 (日) です。 編集会議 6 月 23 日 (日) です。 記事原稿は 6 月 16 日 (日) 正午までに信徒会館 受付へご提出願います。(広報部) http://www.rokko-catholic.jp	カ ト リ ッ ク 六 甲 教 会 〒657-0061 神戸市灘区赤松町 3-1-21 電 話 0 7 8 - 8 5 1 - 2 8 4 6 F A X 0 7 8 - 8 5 1 - 9 0 2 3 発 行 責 任 者 松 村 信 也 編 集 広 報 部
---	--